

ICTが中小企業に開く 限りない可能性



一橋大学大学院国際企業戦略研究科教授 石倉 洋子

ICT（情報通信技術）が日進月歩で進み、競争の「場」が広がる中、規模が小さい企業を経営していく上で、新しい課題、進むべき方向、解決案の選択肢に大きな変化はあるだろうか。

このような事業環境の変化は、規模の小さな企業や個人にとって今までにない機会を開いていると私は確信している。それは、Web2.0と呼ばれる時代には、「個」が見える、「個」が世界レベルで結びついてその力が「集合」として発揮されるインフラが整備され、今までのルールやゲームのやり方が通用しなくなりつつあるからである。従来、力を持ってきた国、業界、有名ブランド、大規模、歴史や伝統のある企業など、今までの「権威」を破壊する限りない可能性が開かれつつある。ICTの力により、場所、時間、物理的な資産規模などの重要性が減少し、こうした限界に阻まれてきた想像力・創造力のある個人、組織、地域、国が世界にアピールできるようになってきたからである。

風力技術の昭和電機など、規模が小さくてもユニークな能力や技術、知恵がある企業は、最近では誰にでも手に入るICT技術で世界に発信すれば、世界のどこからでも引き合いが来る。

だからといって、発想を変えず、従来のまま事業を運営するのでは、企業は瞬時に停滞してしまう。個の力が無限に広がる中では、ある程度規模のある市場が価値を認め、お金を払う「ユニークさ（独自性）」とその背後にある確固とした信念、それを常に見直し、更新していく規律あるプロセスが必要である。創業当初はベンチャーであった堀場製作所、日本電産など、自社にしかない技術や能力と世界でリーダーになるという気概があれば、相手がどこにあるどんな有名大企業であれ、対等な立場で協働・競争・交渉できる。今までのしがらみや、前例がないという言い訳は、世界が競争の場になる時代に、通用しないばかりか、それにしがみついている組織には恐竜と同じ運命が待っている。

また、ベンチャーの次のステージにも新しい可能性が開かれている。それは自分の創業した企業を売却し、その資金によって、次のベンチャーを創業するという選択肢である。自ら創業した企業は自分の子供のようになかなか後継者に渡せない、まして他人に売却などもつてのほかと思われるのが普通である。

しかし、これだけ変化のスピードが速い時代においては、そのユニークな価値を他の組織の力と結びつけて、短時間のうちに最大限生かすという考え方も有効である。元の創業者はそこで得た資金を用い、次の創業を目指す。最近脚光を浴びている台湾、インド、中国にシリコンバレータイプのハイテクのオープン・システムによるクラスターが出現しつつあるのは、実際に世界で勝負した経験を新たな創業で生かして創業をシリアル化し、その地域や国の競争力を上げ、地域社会に貢献しているからである。二〇〇七年には、こうした壮大な志を持つことを提案したい。